【ポスター発表】

「実習前評価システム（短期大学版）」の改定

－学生の主体的な実習事前学習の促し－

○帯広大谷短期大学　　阿部　好恵（8748）

樋田　幸恵（淑徳大学短期大学部・5531）

キーワード：実習前評価システム（短期大学版）、スーパービジョン、自己学習

１．研 究 目 的

社会福祉士養成において、相談援助実習に臨む学生の「実習生適格性」とそれを明確化する評価の必要性が教員用テキスト等で指摘されている[1]。本学では、日本社会福祉士養成校協会北海道ブロックで施行している実習前評価システムを踏襲し、短期大学の状況に即した「実習前評価システム（短期大学版）」を考案・施行した。さらに本システムをＡ大学短期大学部（以下、Ａ短大）で試行し、システムを検討している[2]。本システムは、前提科目を踏まえた知識群から出題される OSCE（実習前技術試験：面接試験）・擬似 CBT（実習前知識試験：ペーパー試験）の他、1 年後期の冬期休暇中に記述式の課題「実習前コンピテンス・アセスメント 実習へ臨む自己の姿勢」（以下、記述式課題）から成るが、Ａ短大で本システムを開始する 1 年次後期は前提科目 21 科目中 12 科目が並行履修もしくは未履修という課題点があり、学生へのアンケート調査からは、未履修科目に係る試験内容や課題の改良、学習会の設定等の必要性が示唆された。このため、本研究ではより 2 年間の養成課程に適した「実習前評価システム（短期大学版）」の改定を目的とする。

２．研究の視点および方法

Ａ短大実習演習担当教員と協議し改定した点は、記述式課題の各項目と関連する前提科目の明示、学生へのフィードバックの強化、知識群配布時の学習会の実施、システム全体の実施日程の変更であった。また、本システムを「相談援助実習指導」の科目内に位置付け施行し、合格基準に満たない学生には再挑戦の機会を設定することとした。このため、学生の実習事前学習への意識化や自己学習の促しのため改定した本システムのうち、現時点で実施した記述式課題・フィードバック・学習会を通しての学生の変化に着目する。

対象は、平成 28 年度に相談援助実習を行うＡ短大学生 20 名とした。研究の方法は、2015（平成 27）年 12 月に記述式課題[3]を配布し、翌年 1 月の講義内に回収するとともに課題への取り組みに関するアンケート調査を実施した。2 月に記述式課題の結果に基づき 4 グループに分けフィードバック、学習会を開催するとともにアンケート調査を実施した。なお、5 月下旬以降に OSCE（短期大学版）、擬似 CBT を実施する予定であり、詳細は当日発表する。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき研究を行った。実習演習担当教員、学生へ書面及び口頭にて研究協力を依頼した。また、試験結果や調査結果は統計的に処理を行い個人が特定されないよう配慮すること、科目の成績への影響はないことを伝え同意を得た。

４．研 究 結 果

記述式課題の 5 項目の平均値は「自己覚知・自己理解」3.10、「対人コミュニケーション」4.39、「自己の判断傾向」3.74、「自己が相手にどう見えているか」3.65、「学習の仕方の理解」3.05 であった。さらに、調査結果から取り組み時間は 5 分～5 時間で平均 92.25 分であることがわかり、課題に取り組む上で何か調べたかという質問に対し「あまり調べなかった」「調べなかった」と答えた 12 名の理由として多かった回答は「何を調べればよいかわからない」であった。また、フィードバック・学習会を受けた学生全員がいずれも「参考になった」「少し参考になった」と回答していた。フィードバックを通じ「自分で分かっていても少し手を抜いてしまう部分を先生はきちんと分かっていた。この先の為に向き合おうと思った」、「課題に対して１つ１つにコメントをしてくれ、きちんと見てくれていると感じて嬉しかった」等と述べており、学習会を受けての自身の変化について「なんとかなると思っていた。しかし、やる気や自信だけでは結果はついてこない。勉強は必要」、「あまり自信が無い。何で調べれば良いのか分からず、勉強する気力も無かったが、何で調べれば良いのかが分かり、勉強しようと思えるようになった」等の記述があった。

５．考 察

本システムの改定により記述式課題によって学生は可視化された自身の特徴を知るだけでなく、フィードバックを通して教員とデータを共有し実習生としての不足部分の指摘と支持的なコメントを受け「実習生になる」ことを意識した自己理解が見受けられた。さらに、学習会で自己学習の道具や過去の学生の自己学習ノートを閲覧したことで学習方法を理解した学生の中には自己学習を肯定的に捉え直していた者がいた。本システム前期に、相談援助実習以前の事前学習に向き合うための「腹づもり」の確認、学生が「とき」や「期限」を意識する時期に合わせて課題や自己学習を促す機会を定期的に設定することで、学生が主体的に実習を意識化する転換期にできるよう働きかける必要があることが明らかとなった。また、短期大学の場合は、学生だけでなく、教員側の早期の「学生理解」も必要なため、本システムがスーパービジョン関係を深めるツールになる可能性も示唆された。

---

[1]例えば、米本秀仁（2009)「第 4 章 実習指導概論」社団法人日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版，84. や川上富雄（2015)「第 1 章 実習指導概論」一般社団法人日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト第 2 版』中央法規出版，52. が挙げられる。

[2]阿部好恵（2016)「短期大学における実習前評価の検討―「実習前評価システム（短期大学版)」の試行的実施から―」『帯広大谷短期大学紀要』53,1-9.

[3]回答方法は「説明できる」「実行できる」に 7 段階評価を採用し、「記述できる」には記入欄を設けた。